

第 27 回川井記念賞受賞論文

論文名 「前期高齢者および後期高齢者の健診結果と死亡・要介護発生の
中長期的な関連 ―国保データベース(KDB)システムを活用した
分析―」
(「厚生の指標」第 71 巻第 12 号(2024 年 10 月)掲載)

論文の骨子と講評

(1)骨子

栃木県の国民健康保険被保険者および後期高齢者医療被保険者のうち、2013 年度に健診を受診し、要支援・要介護認定を受けていない 65 歳から 89 歳までの男 51,317 人、女 61,269 人、合計 112,586 人を対象として、健診結果や質問票の回答内容に基づいてグループ分けを行い、健診受診日から 2022 年 6 月末までの間で、死亡または要介護2以上となる自立喪失の発生について観察した。その結果、17,011 人が死亡し、9,125 人が要介護2以上となり、自立喪失した者は 26,136 人であった。

前期高齢者の健診受診日から8年経過時点での自立者の割合が最も低かったのは、男では血色素低値グループの 67.2%、女では eGFR 低値グループの 77.7%であった。また、後期高齢者については、男女とも血清アルブミン低値グループが自立者の割合が最も低く、それぞれ 30.2%、37.5%であった。

前期高齢者の自立喪失リスクの比をみると、男で基準より高かったのは、HbA1c8.0%以上グループの 1.85、血色素低値グループの 1.66、AST 高値グループの 1.54、女ではⅢ度高血圧グループの 1.97、血清アルブミン低値グループの 1.95、HbA1c7.5%以上 8.0%未満グループの 1.78 であった。また、後期高齢者の男では血清アルブミン低値グループの 1.42、尿蛋白+以上グループの 1.37、BMI20 kg/m²未満グループの 1.34、女ではγ-GTP 高値グループの 1.64、血清アルブミン低値グループの 1.52、HbA1c8.0%以上グループの 1.42 が高かった。

高齢者のリスク因子としては、低栄養のほかに生活習慣病等もあることが分かった。高齢者の健康増進のためには、若年からの生活習慣病重症化予防を行うとともに、早期にフレイル対策等を中心とした保健指導に移行することが効果的であると考えられる。

(2)講評

10 万人以上の高齢者を対象とした、サンプルサイズの大きな統計データについて、8年間の自立喪失までを追跡し、自立喪失に関連するリスク因子を検討した優れた研究であり、かつ、国民健康保険と後期高齢者医療をつなげることにより研究の価値が高まっている。BMI などは原因と結果の関連の方向について多少疑問もあるが、研究の限界についても適切に言及されており、自立喪失リスクの比の数値は、多くの高齢者にとって参考になるものであろう。今後、特定健診・保健指導等の保健事業を推進するうえでも有益な研究内容である。

著 者

栗田 淳弘(くりた あつひろ)

栃木県国民健康保険団体連合会情報
管理課総括課長補佐兼システム管理
担当リーダー

中村 好一(なかむら よしかず)

宇都宮市保健所所長